

外遊びを好まない児童の運動参加

早川 綾乃（愛媛大学）

1. 研究目的

近年、子どもたちの外遊び時間の減少が指摘されている。児童クラブでの活動を観察すると、外遊びに積極的な子どもとそうでない子どもの二極化が見られ、両者の違いにはパーソナリティや日常の過ごし方が影響していると考えた。

本研究では、外遊びを好まない子どもたちのパーソナリティに着目し、外遊びへの参加意欲や行動への影響を検討する。さらに、外遊びの減少原因を分析し、外遊びを好まない子どもたちが積極的に遊びに参加できる環境作りを提案する。

2. 調査 1

外遊びが減少した原因を特定するため、大学生を対象に自由記述による質問紙調査を実施した。回答を KJ 法により分類した結果、「外的要因」「将来」「室内遊びの多様化」「外遊びへの嫌悪感」の 4 つに分けられた。この結果をもとに質問項目を作成し、因子分析を行ったところ、「周りの環境」「制約がある」「遊びへの抵抗感」「外遊びへの不安」「遊びの選択肢の広がり」「室内遊びの充実」「多忙」の 7 因子が抽出された。

次に、因子分析の結果に基づいて「子どもの外遊び減少に関する質問紙」を作成し、大学生 122 名を対象に 21 の質問項目に対し 5 段階評定で回答を求めた。また、フェイスシートでは、性別、年齢、運動の好き嫌い、得意不得意、子どもの頃の外遊びや人との関わりの好み、余暇の過ごし方を尋ね、外遊びを好まない子どもの増加要因と運動の好き嫌いや得意不得意などとの関連性を検討した。

3. 調査 2

外遊びに関する意識や行動とパーソナリティ特性との関係を明らかにすることを目的とし、小学生 57 名を対象に質問紙調査を実施した。

1) フェイスシート

性別や学年に加え、学校の休み時間や自由時間にどのような遊びを好むかを尋ねた。

2) パーソナリティ特性に関する調査

YG 性格検査（小学 2～6 年生用）をもとに、1・2 年生にも理解しやすいよう表現を調整し、質問項目を 8 項目から 4 項目に絞った質問紙を作成した。実施前に児童へ内容を確認し、理解度を確かめた上で、「社会的外向性」「思考的活動性」「一般的活動性」「のんきさ」「非協調性」「神経質」「劣等感」「抑うつ性」の 8 つのパーソナリティ特性と遊びの好みを尋ねた。

3) 児童クラブの先生への聞き取り調査

子どもたちの運動能力やよく遊ぶ場所、遊びの種類について尋ねた。

4. 結果と考察

大学生を対象とした調査 1 では、外遊びを避ける主な理由として「遊びへの抵抗感」が多く挙げられ、特に幼少期に運動が苦手だった人ほどその傾向が顕著であった。また、調査 2 で、室内遊びを好む子どもは、屋外遊びを好む子どもよりも「思考的活動性」や「のんきさ」、「非協調性」が高く、さらに「神経質」な傾向がみられた。これらの結果から、「遊びへの抵抗感」と「神経質」には関連があると考えられる。

さらに、運動能力とパーソナリティの関係を分析した結果、運動能力が低い子どもの方が「劣等感」を感じやすい傾向がみられた。運動が苦手な子どもは、周囲と比較して「できない」と感じる場面が多く、それが劣等感につながる可能性がある。

このことから、運動が苦手な子どもには、成功体験を積みやすい遊びや運動環境を整えることが重要である。具体的には、競争の要素を減らし、一人ひとりの成長を実感できる遊びを取り入れることで、運動への抵抗感を和らげ、自己肯定感を育むことができると考えられる。

また、神経質な子どもは、周囲の環境や予測できない出来事に対して敏感に反応し、友人との意見の食い違いなどが外遊びを避ける要因となる可能性がある。しかし、過ごしやすい環境が整い、ルールが明確であれば、外遊びへの抵抗感が軽減され、外遊びに参加しやすくなると考えられる。